紹介

平井松午・安里進・渡辺誠編『近世測量絵図のGIS分析――その地域的展開――』

近年、歴史GIS（地理情報システム）を用いた研究が盛んである。和書の近刊でも矢野桂司編『京都の歴史GIS』（ナカニシヤ出版、二〇一一）やHGIS研究協議会編『歴史GISの地平』（勉誠出版、二〇一二）が記憶に新しい。二〇一二年にはアジア歴史地理情報学会が設立され、その翌年から会誌（JANGIS）の刊行も始まった。

歴史的な研究にGISを用いる際、単に作図ソフトとして利用するだけでなく、GISがなければ困難な手法やテーマを開拓することが重要であるが、その点でも興味深い提案や成果が出されるようになってきた。本書もその好例であり、近世日本における大縮尺の古地図と測量を焦点としたGIS分析の論集である。編者の一人である歴史地理学の平井松午氏をリーダーとする共同研究（平成二一～二四年度科研費・基盤研究B「近世実測図を活用した古地図GIS解析法の構築」）の成果を踏まえたもので、考古学の安里進氏と科学史の渡辺誠氏が共編者として加わっておられる。

本書の内容は大きく二部に分かれ、第I部「測量術の地域的展開と近世測量絵図」（一～八章）は近世の測量技術の検討を、第II部「GISを用いた絵図解析の可能性」（九～一七章）は古地図の精度などの分析例を提示している。いずれも多くの章が近世の古地図がもつ歪み、あるいは地図学的な精度の問題を論点としているが、特に測量技術とその系譜に焦点を絞った論考が第I部にまとめられ、琉球王国（一・二章）、加賀藩（三章）、徳島藩（四・五章）、熊本藩（六章）、鳥取藩（七・八章）の事例が論じられている。地方によって、また藩によって異なる面があった測量技術の進展や人的な系譜が描き出されており、近世の測量術がまさに「地域的に展開」していたことが如実に示されている。測量をめぐる知の地理を捉えようとした成果として読むこともできるだろう。

なお、琉球王国と加賀藩の例では街路の長さを測定することで、また徳島藩・鳥取藩の例では古地図をGISに読み込んだ上で、地図の精度が検討されている。後者の場合、古地図上で位置を同定できる地点（コントロールポイント）を設け、実際の位置との齟齬が全体として最小となるように補正し、その上で図の精度が分析されている。

このように古地図をGISに読み込む手法は、第II部でも多用されており、金沢（九章）、鳥取（一〇章）、鶴岡（一三章）、佐賀（一四章）の城下町絵図が分析されている。いずれもある程度の精度に到達していたことを示すものであり、「近世測量絵図のGIS分析」という書名をよく表している。ほかに、名古屋の例に触れる章（一一・一二章）も含まれている。また、一五章から一七章は、GISを用いる際の様々な技術的な問題を扱っており、実質的に第III部といってもよい構成となっている。

以上の章のなかには、単に分析例にとどまるのでなく、そこからさらに課題を導く章も含まれている。その一つは、古地図の情報をGISに落とし込み、土地利用データベースとして活用した一〇章である。屋

敷地管理を作成目的とした城下町絵図が、必ずしも土地利用を正確に反映していない可能性を指摘しており、城下町絵図には当時の景観がそのまま記録されているという暗黙の想定に警告を発している。

また、近世の古地図の精度は必ずしも図中で一定であったわけでなく、各部位で歪みの度合いが異なることが少なくない。その点に関して、一五章と一七章は、コントロールポイントを用いて精度を分析する際、その解釈の仕方が重要だと説いており、古地図の歪みを考える際に、まだまだ考えなければならない課題が残っていることを示唆している。現代の地図学的な価値観を前提としたGISで古地図を分析する場合、その機能を単に適用するだけでは、古地図の特徴を十分に引き出せるとは限らない。古地図に内在する論理をいかに汲み取るのか、さらなる工夫が求められているのだろう。

ほかにも触れておきたい成果や課題があるが、紙数が尽きた。本書が歴史GISへの関心をいっそう喚起し、さらに新しい分析手法や問題関心が生み出されることを期待したい。

（B5判　二九五頁　二〇一四年一月　古今書院　税別九四〇〇円）

（米家泰作　京都大学文学研究科准教授）

受贈誌

（二〇一四年三月二四日～二〇一四年七月十日）

信濃（信濃史学会）六六―三
文化學年報（同志社大学文化学会）六三
人文學（同志社大学人文学会）一九三
中央研究院　歴史語言研究所集刊（中央研究院歴史語言研究所）八四―四
皇學館大學史料編纂所報（皇學館大學史料編纂所）二四一
皇學館大學紀要（皇學館大學）五二
九州国際大学　法学論集（九州国際大学法学会）二〇―一・二合併号
考古学報（中国社会科学考古学研究所）二〇一四―一
古代文化（古代學協會）六五―四
立命館文學（立命館大学人文学会）六三六
立命館文學（立命館大学人文学会）六三七
栃木史学（國學院大學栃木短期大学史学会）二八
史淵（九州大学大学院人文科学研究院）一五一
関学西洋史論集（関学西洋史研究会）XXXVII
神道宗教（神道宗教学会）二三二
神道宗教（神道宗教学会）二三三
東洋文化（東京大学東洋文化研究所）九四
経済論究（九州大学大学院経済学会）一四八
韓国民族文化（釜山大學校韓国民族文化研究所）五〇
駿台史學（駿台史学会）一五〇
駿台史學（駿台史学会）一五一
東北学院大学論集　歴史と文化（東北学院大学学術研究会）五二
紀要　史学（中央大学文学部）五九
美術研究（東京文化財研究所）四一一
美術研究（東京文化財研究所）四一二
経済論集（ソウル大学校経済研究所）五二―二
松本市史研究（松本市）二四
国立歴史民俗博物館研究報告（国立歴史民俗博物館）一八五
東洋大学文学部紀要（東洋大学）六七史学科篇三九